

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18330074

研究課題名(和文) インドにおける労働集約型経済発展と労働・生活の質に関する研究

研究課題名(英文) The Labour-intensive Path of Economic Development and the Quality of Labour and Life in India

研究代表者

杉原 薫(SUGIHARA KAORU) 京都大学東南アジア研究所・教授

研究者番号：60117950

研究成果の概要：

インドにおける労働集約型経済発展の特質を比較史的に考察し、土地が不足していない状況で膨大な人口増加を経験した 16-19 世紀の発展径路が、土地以外の環境要因(降雨量と降雨パターン、生態系の変化、疫病の広域化など)への対応から説明できる部分が多いこと、19 世紀末以降の径路も、それに土地の不足と国際経済要因への対応が加わって形成されたとする仮説を得た。個別産業、エネルギー利用、労働観の研究においても成果が得られた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	6,600,000	1,980,000	8,580,000
2007 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2008 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
総計	14,100,000	4,230,000	18,330,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：インド、労働集約型経済発展、労働の質、生活水準、中小工業

## 1. 研究開始当初の背景

現在、インド経済は大きく変貌しつつある。この変貌を理解するためには、インド経済の歴史と現状の理解に、根本的なパラダイム転換を迫る議論が必要ではないか、と論争がいま、国際的に巻き起こっている。

従来の英語圏での研究は、圧倒的にイギリスとインドの関係を中心に、インド経済史を考えてきた。例えば、イギリスはインドに産業革命の恩恵をもたらしたとするイギリス側の見解と、バグチのように「工業の衰退 deindustrialisation」をイギリスの工業化の不可欠の裏面として捉えるインド側の見解は、いずれもランカシャーの綿布のインド市場への浸透がインドの伝統的織

維工業を衰退させたとする認識を共有してきた。しかし、近年、ティルタンカル・ロイは、この点に疑義を差し挟み、20 世紀初頭以降の手織綿織物業における量的発展や労働生産性の上昇を *Economic History Review* 誌上で主張した(“Acceptance of Innovations in Early Twentieth Century Indian Weaving”, *EHR*, 55, pp.507-32, 2002)。

ロイはさらに *Rethinking Economic Change in India* (Routledge, London, 2005) などにおいて、インド経済史の現状を批判し、植民地期と独立後の経済発展の歴史を断絶的に捉える従来の理解に全面的な修正を迫る議論を提起している。そのも

っとも重要な柱の一つは、日本の研究者との接触をつうじて得られた、農業と工業における「労働集約型」発展の概念である。ロイを含めて本研究の参加者は、アジアにおける「労働集約型の発展」がインド経済の理解の鍵を握る概念であると考えている。しかし、インドにおいて実際にどの程度この型の発展が見られたのか、あるいはそれをどう解釈するのかについては、重要な点で理解は異なる。これが研究開始当時の認識であった。

## 2. 研究の目的

こうして本研究は、ロイ、杉原、柳沢の比較史的観点からの問題提起をふまえて、インド経済発展の歴史的起源に関する従来の見解を再検討すること、関連する論点について実証的検討を加えること、これらによって、インド経済の歴史と現状に関する新しい分析枠組の構築に貢献することを目指すものとなった。

具体的な研究は、こうした問題意識を共有しつつ、分担者の専門に沿って行われた。大きな枠組のレベルでは、労働集約型農業と工業の長期的な発展径路の再検討が問題となった。すなわち、インドでは人口増加にもかかわらず、東アジアのような労働集約型農業が発達しなかったとされるが、その原因を探るとともに、若干の歴史的な発展の事例があるのでそれを参考にして、労働集約型農業の今後の発展の可能性を検討することが必要であろう。また、19世紀以降の在来産業の残存、発展や、1991年以降の自由化のもとで脚光を浴びたパワールームによる綿布・アパレル生産の成長を整合的に理解しなければならない。

さらに、これを比較アジア史の観点から解釈し、国際的な学術交流をつうじて、アジア史における新しいパラダイムの構築と普及を目指す。これらが当初のアジェンダであった。

## 3. 研究の方法

これにもとづき、インド農業をめぐる生態的条件の検討（とくに、19世紀末に土地が稀少になったという理解の再検討。灌漑など、インド農業を巡る生態的条件の検討。従来手薄だった在来エネルギーの利用形態の分析）、価格データの収集と加工、賃金データの収集と加工、中小工業、サービス産業、女性労働、農家副業の役割の検討、労働の質、勤勉性や教育水準、生活水準の検討などを行い、現段階での歴史学的

知識の水準を総合化することが目指された。そのために、メンバー全員がインド、イギリスで資料収集を行い、研究会、国際シンポジウムで報告した。

## 4. 研究成果

### ①インド経済史の枠組の再構築

分析枠組の構築については、柳沢とロイとのあいだに見解の相違があり、ロイに比較的近い杉原とのあいだにも若干の差がある。それらの点について精力的にサーベイを行ってきたのは柳沢である（柳沢論文⑥⑨⑫）。本研究においても、関連する論点について、議論を重ねたが、以下では研究代表者である杉原の現段階での理解を中心に報告する。

19世紀末以降の人口増加のもとで、東アジアのような労働集約型農業の一般的成立がインドにおいて未達成であること、それがインド農業の停滞や人々の貧困をもたらしているという歴史と現状については、見解が一致している。しかし、その原因をいかに理解するか、労働集約型農業は成立する方向にあったのかどうかについては、合意は見られない。また、19世紀以降の在来産業の残存、発展や、1991年以降の自由化のもとでインドの最重要輸出品の一つとなった、小規模工場（パワールーム）による綿布・アパレル生産は、工業における「労働集約型発展」があったことを示唆している。もっとも、その歴史的連続性と変化の実態については、なお不明の点が少なくない。ロイは、本研究の国際シンポジウムでの報告で、手工業の発展径路と近代工業のそれとのあいだに系譜上のギャップがあることを強調した。

杉原は、16-19世紀における人口増加の原因を環境要因との関係で再検討し、この時期に耕地の拡大と森林伐採を両翼とする大きな生態系の変化（不安定化）があったことが、それ以降の経済発展径路に影響しているのではないかと考えた。土地が稀少だった地域も存在したにもかかわらず、19世紀末までの時期に、土地生産性の上昇に集中した技術・制度の発展がみられなかったのは主としてこのためではなかったか。逆にいえば、19世紀末以降の発展には、より一般的な土地圧力が前提されていただけに、東アジアとの径路上の共通点がより明確に見られる。柳沢の強調する「下層民の自立」の契機も、この文脈では東アジアの経験と重ねて考えることもできよう。ただし、それまでの径路依存が現在まで残っている部分もあり、環境との関係では相違点が多い。共有地の減少に関する柳沢論文⑧⑪は従来の文脈においても重要な研究であるが、さらにこうした観点からも位置づ

ける必要があるように思われる。

他方、19-20世紀のインドにおける在来エネルギー利用の歴史が少しずつ明らかになってきた。在来エネルギーの太宗はバイオマス起源であるが、神田の事例研究(論文②③)、サーベイ(論文⑦)によれば、そのローカルな利用可能性が在来産業の発展に影響していた。19世紀後半以降、人口の増加による国内市場の拡大と、農業の商業化、輸出用第一次産品への特化による耕地拡大が相俟って、在来産業の依拠するエネルギー・ベースに大きな転換があったように思われる。にもかかわらず、現在にいたるまでインドの農村の多くは在来エネルギーへの依存を続けている。森林伐採、荒蕪地の増加など、「非土地」部分の変化が、工業の長期的な変化にも影を落としていることは明らかである。

さらに、マラリアなどの疫病の蔓延も、経済発展径路に大きな影響を及ぼした。脇村が強調してきたように、19世紀末から20世紀初頭において飢饉と疫病の重畳による死亡率の上昇が生じたが、その分布と半乾燥地帯における水不足とのあいだにはある程度関係が見られたようである(論文⑭)。脇村は、半乾燥地帯の農業が必ずしも労働集約型に収斂しなかったことと、インドにはサービス・セクターでの雇用が比較的多いという現象とも関係があるのではないかと論じた(図書⑤)。水の利用形態は、カースト制度とも強く関連している。だが、イギリス植民地政府は、土地所有を基礎とする制度の導入に際して、不安定化した生態系への対応に関心を集中することはなかった。森林省などに部分的に見られた問題の指摘は、全体としては事実発見の域を出なかった。制度的対応は事実上従来の制度や慣行の活用に委ねられたのである。

インド経済の発展径路をこうした方向で理解するならば、一方で柳沢やロイが抽出した労働集約型経済発展への傾向が、東アジア型径路ほどの生産性の上昇を経験しないまま長期にわたって継続してきたこと、同時に、環境要因への対応が労働・生活の質を規定し続けてきたことを整合的に解釈できるのではないかと考えられる。

植民地期の自由貿易の評価や、独立後、1991年の改革を経て現代にいたる経済政策の評価については、柳沢とロイとのあいだにかなり基本的な対立点も残されているが、長期の労働集約型発展径路に対する関心が共有されていることがそれらの議論を意義のあるものに行っていると言えよう。

## ②その他の関連する実証研究

研究会で議論されたものを中心にピックアップすると、杉原は、インドの外国貿易統

計と、国際機関のデータにもとづいて、20世紀後半における在来エネルギー利用に関する情報を国際比較の観点から論じた(学会発表④、図書①、および論文①、図書②の一部など)。

柳沢は、すでに触れた農業と環境の関係についての研究のほか、学会発表⑤、図書④などで、労働集約型工業にかかわる従来からの論点(農業との関係、消費構造との関係など)をさらに深めた。

脇村は、学会発表⑥⑦、図書⑥でマラリア、コレラの流行と公衆衛生との関連をイギリス帝国史の文脈で論じた。

大石は、自転車、マッチをはじめとする労働集約型産業をとりあげ、日本との関係を含む国際的連関のなかでこれらの産業や商品がいかんしてインドに根付いていったかを論じた(論文⑱⑲)。

また、ムスリム商人の広域的活動を、ネットワーク、国家、帝国の絡みあいのなかで論じた論文を発表したが、そこで扱われている商品の多くも研究蓄積の少ない労働集約型産業の製品である(論文⑳㉑、学会発表⑧、図書⑫など)。

神田は、ベンガルの塩取引における商人と市場制度を論じ、19世紀前半のインドにおける市場制度の一面を描いた(論文㉒)。

西村は、労働集約型工業化における近代セクターの中心となった20世紀初頭のボンベイの綿業地帯に注目し、小額貨幣の流通を論じた(図書⑭)。

長崎は、ガンディーの思想と行動をインド近現代史全体のなかに位置づけるとともに(論文⑲⑳)、かれの労働観を、かれが影響を受けたとされるラスキンのそれと比較し、工業化に対する態度を吟味した(図書⑦)。

## ③国内外でのインパクトと今後の展望

杉原は、「南アジア型経済発展径路」が存在したのではないかとという仮説を、日本語、英語で何回か発表した(学会発表④、図書①②など)。脇村も、疫病史と労働集約型発展の関係を意欲的に論じた。その他のメンバーも、国の内外でみずからの研究を発表する多くの機会を作った。さらに、本研究と並行して行われた京都大学グローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」が主催する多くの研究会や国際シンポジウムでも、本研究の構想が議論された。以下に記す成果はその一部にすぎない。また、本研究の締めくくりとしてロイ氏を招いて行った国際シンポジウムのProceedingsにも成果の一部が紹介されている。

しかし、これらの成果はいずれもまだ枠組の構築の段階であって、実証研究との融合によって研究史上のインパクト作り出す

ところまでは行っていないというべきであろう。今後の成果の刊行によって、議論がさらに展開していくことが期待される。

幸い、この研究を報告、討論するために、2009年8月にユトレヒトで開催される世界経済史会議のセッションを応募したところ、採択された。ここでの議論をバネにしてより本格的な論文集の刊行を目指したいと考えている。

また、エネルギー史については、本研究をひとつの想源とする新しい科研が今年度から発足した。杉原、柳沢、神田はここでも本研究をさらに発展させる予定である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 30 件)

1. 杉原薫、「東アジア・中東・世界経済—オイル・トライアングルと国際経済秩序—」『イスラーム世界研究』、第2巻1号、69-91頁、2008年、査読有
2. Kaoru Sugihara, "Labour-intensive Industrialisation in Global History", *Kyoto Working Papers on Area Studies*, No.1, 52, 2007, 査読無
3. Kaoru Sugihara, "The Second Noel Butlin Lecture: Labour-Intensive Industrialisation in Global History", *Australian Economic History Review*, Vol.47, No.2, 121-54, 2007, 査読有
4. Kaoru Sugihara, "The Human Resource Path of Economic Development: A Perspective from Asian Experiences", (CD-ROM) *XIV Economic History Congress*, 2006, 査読有
5. Kaoru Sugihara, "From De-industrialisation to Labour-intensive Industrialisation: Tirthankar Roy and the Revision in Indian Economic History", *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, No.18, 238-243, 2006, 査読有
6. Haruka Yanagisawa, "Towards a New Historiography: Japanese Studies on the Economic History of Modern India", 『歴史と経済』、202号、36-45頁、2009年、査読有
7. 柳澤悠、「アジア・中東における伝統・環境・公共性 プロジェクト」、『公共研究』(千葉大学)、第5巻第4号、39-44頁、2009年、査読無
8. Haruka Yanagisawa, "The Decline of Village Common Lands and Changes in Village Society: South India, c.1850-2000", *Conservation & Society*, Vol. 6, No. 4, 293-307頁、2008年、査読有
9. 柳澤悠、「現代インドの経済成長と農村の社会経済の変容」『経済研究』(千葉大学)、第23巻第3号、283-314頁、2008年、査読無
10. 柳澤悠・栗田禎子・寺尾忠能、国際シンポジウム『アジア・中東における「伝統」・環境・公共性』、『アジア経済』、Vol.48, No.8, 66-77頁、2007年、査読有
11. 柳澤悠、「南インドにおける村落共同利用地の歴史的変動：1850年以降のタミルナドゥの乾燥地帯の場合」『公共研究』(千葉大学)、第4巻第3号、32-37頁、2007年、査読有
12. Haruka Yanagisawa, "Free Trade System and Economic Development in India: A Comment on Roy's Argument", *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, No.18, 234-238, 2006, 査読有
13. Kohei Wakimura, "Book Review: Decolonizing International Health: India and Southeast Asia, 1930-65", *International Journal of Asian Studies*, Vol. 6, Part 1, 140-143, 2009, 査読有
14. Kohei Wakimura, "Health Hazards in 19th Century India: Malaria and Cholera in Semi-Arid Tropics", *Kyoto Working Papers on Area Studies*, No.9, 1-15, 2009, 査読無
15. 脇村孝平、「長期の19世紀—インド系企業家の系譜」、『南アジア研究』、第19号、124-131頁、2007年、査読有
16. 脇村孝平、「疫病のグローバル・ヒストリー—疫病史と交易史の接点」、『地球研究』、第7巻第2号、39-58頁、2006年、査読有
17. 長崎暢子、「トランスナショナル化する在外インド系ネットワーク」、『21世紀フォーラム』、No.106、16-22頁、2007年、査読有
18. Nobuko Nagasaki, "The International Impact of the Provisional Government of India: The Japanese Response to Bose's Initiative during the World War II", *Journal of the Socio-Cultural Research Institute*, Ryukoku University, Vol.8, 275-294, 2006, 査読無
19. Nobuko Nagasaki, "Satyagraha as a Non-Violent Means of Conflict Resolution", *Working Paper for the Afrasian Centre for Peace and Development Studies*, Ryukoku University, No.3, 21, 2006, 査読無
20. 長崎暢子、「ディアスポラとインド・ナショナルリズム—非暴力不服従運動<サッティヤーグラハ>の誕生」、『インターカルチュラル』、第4号、33-51頁、2006年、査読有
21. Takashi Oishi, "Aspects of Labour

- Intensive Economy around Bicycles in Modern India with Special Focus on the Import from Japan”, *Kyoto Working Papers on Area Studies*, No.73, 1-24, 2009, 査読無
22. 大石高志、「インドにおけるマッチ産業と女性・児童の労働—矮小化と弾力性の表裏関係」、『外国学研究』、66号、77-105頁、2007年、査読有
  23. Takashi Oishi, “Indian Muslim Merchants in Mozambique and South Africa: Intra-regional Networks in Strategic Association with State Institutions 1870s-1930s”, *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, Vol.50, No.2-3, 287-324, 2007, 査読有
  24. 大石高志、「繋がり、広がり、逸脱—インドにおけるムスリム皮革・食肉商工業者のネットワークとその恣意的読み替え」、『現代思想』、34巻6号、212-229頁、2006年、査読無
  25. Sayako Kanda, “Coal, Firewood and Plant Stalks: Availability of Fuel and Development of Industries in Early Nineteenth-Century Bengal”, *Kyoto Working Papers on Area Studies*, No.55, 1-20, 2009, 査読無
  26. Sayako Kanda, “Merchants, markets and the market: changes in the salt trade in early colonial Bengal”, *Discussion Papers in Economics and Business, Graduate School of Economics & OSIPP, Osaka University*, DP 02-2008, 1-20, 2008, 査読無
  27. 神田さやこ、「環境とエネルギー：環境経済史のフロンティア」、慶應義塾大学大学院経済学研究科商学研究科連携21世紀COEプログラム・歴史分析班編『2006年度成果報告書—環境とエネルギー：環境経済史のフロンティア—』、3-11頁、2007年、査読無
  28. Sayako Kanda, “Energy in Indigenous Industries: Re-considering the Decline of the Salt Industry in Mid-Nineteenth Century Bengal”, *Keio University Market Quality Research Project, Discussion Paper Series*, DP2006-25, 21, 2007, 査読無
  29. Sayako Kanda, “The Colonial Transition in the ‘Long’ Eighteenth Century: Reflections on the Presentations of Professors Shinkichi Taniguchi and Tsukasa Mizushima”, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, No.18, 223-228, 2006, 査読有
  30. 西村雄志、「20世紀初頭におけるアジアの通貨制度の展開と植民地支配—準備的考察—」、『歴史科学』、184号、14-20頁、2006年、査読有
- [学会発表] (計8件)
1. Kaoru Sugihara, “Labour-intensive Industrialisation in Global History”, Economic History Seminar, Department of Economics, Northwestern University, Chicago, 17<sup>th</sup> April 2008.
  2. Kaoru Sugihara, “Labour-intensive Industrialization in Global History: Its Impact on Global Income Distribution”, Workshop on ‘Wealth and Poverty in Economic Development, Faculty of Economics, University of Tokyo, 9<sup>th</sup> December 2007.
  3. Kaoru Sugihara, “The Humanosphere-sustainable Path of Economic Development—A Global Historical Perspective—”, The First Kyoto University Southeast Asian Forum in Indonesia: In Search of New Paradigm on Sustainable Humanosphere, LIPI, Jakarta, 26<sup>th</sup> November 2007.
  4. 杉原薫、「南アジア史にとって『生存基盤の確保』とは何か」、日本南アジア学会20周年記念連続シンポジウム 第1回「南アジアという方法と視角—比較と連鎖」、京大会館、2007年11月24日。
  5. Haruka Yanagisawa, “Some Key Aspects in Understanding Historical Changes in South Indian Village Society: Landholding and Non-farm Job Opportunities”, Studying Village Economies in India: A Colloquium on Methodology, Charsa, India, 21-24<sup>th</sup> December 2008.
  6. Kohei Wakimura, “Malaria Control, Rural Health and Urban Health: ‘Social Determinants of Health’ in a Historical Perspective”, The International Conference on the World Health Organization and the Social Determinants of Health: Assessing Theory, Policy and Practice, University College, London, 20<sup>th</sup>-21<sup>st</sup> November 2008.
  7. Kohei Wakimura, “Cholera and British Empire in Asia: Trade and Public Health”, International Workshop ‘Networks and Global Governance in the Past and at the Present: Japanese Scholars ‘Perspectives’, History Department, The Chinese University of Hong Kong, 3<sup>rd</sup> March 2008.
  8. Takashi Oishi, “Japanese Business Sojourners in Calcutta: Living the Business, City, Empire and Networks”, Workshop on Migration, Diaspora and the City: Mobility and Dwelling in Calcutta, Centre for Studies in Social Sciences, Kolkata, India, 12<sup>th</sup>-13<sup>th</sup> December, 2008.

〔図書〕(計14件)

1. Kaoru Sugihara, "The South Asian Path of Economic Development: A Comparison with East Asia", *Labour-intensive Industrialization in South and Southeast Asia: Proceedings of the Joint Workshop, Kyoto University, December 2008*, 6-10 (162), 2009
2. Kaoru Sugihara, "Multiple Paths of Economic Development in Global History", *Proceedings of the Symposium in commemoration of the Executive Committee Meeting of the IEHA*, 1-29 (313), 2009
3. 杉原薫、「東アジアの経済発展と労働・生活の質—歴史的展望—」社会政策学会編『経済発展と社会政策 東アジアにおける差異と共通性』、法律文化社、265、2007
4. Haruka Yanagisawa, "The Growth of Rural Industries in Tamilnadu and Their Domestic Markets, 1900-1950", Noboru Karashima, E. Annamalai and S. Rajaram eds., *Contribution of Tamil Culture to the Twenty First Century*, International Association of Tamil Research, Chennai, 245, 2007
5. Kohei Wakimura, "Scarcity of Land, Division of Labour and Service Sector: The Labour-Intensive Path of Development in Modern South Asia", *Labour-intensive Industrialization in South and Southeast Asia: Proceedings of the Joint Workshop, Kyoto University, December 2008*, 6-10(162), 2009
6. 脇村孝平、「国際保健の誕生—一九世紀におけるコレラ・パンデミックと検疫問題」遠藤乾編『グローバル・ガバナンスの最前線—現在と過去のあいだ』、東信堂、254頁、2008年
7. Nobuko Nagasaki, "Gandhi and Ruskin", *Labour-intensive Industrialization in South and Southeast Asia: Proceedings of the Joint Workshop, Kyoto University, December 2008*, 14-20 (162), 2009
8. Nobuko Nagasaki, "Rash Bihari Bose: Between Nation and 'People's Asia'", *Path from India, Path from Japan: Lecture Series on India-Japan Relations*, 192-211, 2008
9. 長崎暢子、田中敏雄・中村尚司・石坂晋哉編『資料集 インド国民軍証言』、研文出版、630、2008
10. 長崎暢子、田中敏雄・中村尚司・石坂晋哉編『資料集 インド国民軍聞き書き』、研文出版、412頁、2008年
11. 長崎暢子、「2つの世界大戦とインド民族運動—英印関係における政治的イニシアティブの転換」佐々木雄太編『イギリス帝国と20世紀3巻 世界戦争の時代とイギリス帝国』、ミネルヴァ書店、368頁、2006年
12. 大石高志、「インド人商人のネットワーク：広域秩序と雑貨食糧品ビジネス」遠藤乾編『グローバル・ガバナンスの最前線：現在と過去のあいだ』、東信堂、254頁、2008年
13. Takashi Oishi, "Hesitant Touch: Diaspora Networks of Indian Muslim Merchants and their Linkage with Homeland, 1870-2000" in *The International Conference on Globalization and Diasporas. A proceeding volume edited by Research Team for Indian Diasporas*, Channam National University, Korea, 223, 2007
14. Takashi Nishimura, "The Role of Small Money for the Industrialization of Bombay around the 1920s", *Labour-intensive Industrialization in South and Southeast Asia: Proceedings of the Joint Workshop, Kyoto University, December 2008*, 21-28 (162), 2009

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

杉原 薫(SUGIHARA KAORU)

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号：60117950

##### (2)研究分担者

柳澤 悠(YANAGISAWA HARUKA)

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：20046121

脇村 孝平(WAKIMURA KOUHEI)

大阪市立大学・経済学研究科(研究院)・教授

研究者番号：30230931

長崎 暢子(NAGASAKI NOBUKO)

龍谷大学・人間・科学・宗教・総合センター・研究フェロー

研究者番号：70012979

大石 高志(OISHI TAKASHI)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70347516

神田 さやこ(KANDA SAYAKO)

慶應義塾大学・経済学部・准教授

研究者番号：00296732

西村 雄志(NISHIMURA TAKESHI)

松山大学・経済学部・准教授

研究者番号：10412420